

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.23 2010年10月号

ザンビア 住民の健康は、 住民が守る	カンボジア 病院前外傷ケア研修	カンボジア ラジオ番組デビュー	ザンビア 学校建設支援開始	事務局
モンボシ地域での農村部保健医療改善事業がついに終了！4つの成果をご報告します。 ☞p.2-3	救急ケアの一連の流れを学ぶ研修を6月末に実施。その様子をお伝えします。 ☞p.4-5	カンボジアで実施している救急医療支援活動の紹介と質疑応答の様子が、ラジオ番組で取り上げられました。 ☞p.5	モンボシの診療所からさらに北へ車で1時間、ンコンジェ地区のコミュニティスクールの建設が始まりました。 ☞p.6	TICOサポーターの声、「支援のカタチ」をインタビュー形式でお伝えします。ザンビア事務所新職員の紹介もあります。 ☞p.7,8

「国際協力≡何も知らない外国人による一方的な介入」とならないために

TICO 代表 吉田 修

途上国と言われる国々の悲惨な状況を見ると、助けてあげたい、何か協力したいと思うのは人としてごく自然なことである。医者である私などは、非常に高い子供の死亡率などをみると、どうにかしなければと思う。そこで、国際協力ということになるのだが、ここでもう一度考えてみたい。

もし、あなたの家に見知らぬ外国人が突然やって来て、片言の日本語で、あるいは通訳を介して「何何は良くない、間違っている。こうするべきである。我々が教えてあげるから研修会に集まりなさい。」などと言われたらどうだろう。

しかもそれが、「そんなことはみんな知ってるよ、だけど〜の事情でできないんだよ。外国人にはそれが分からないのさ。」ということだったりする。

実際にザンビアの現状を見ていると、我々がこうするべきだと思うようなことは、既

に多くのザンビアの人たちが取り組んでおり、かなりの成果を上げている。

我々は所詮外国人である。ザンビアの貧民街や村で彼らと同じ生活をしたこともなく、温かいシャワーの出るきれいな家からいい車で時々訪問しているだけである。それが悪いと言っているのではない。私を含めて我々はそうしないととても仕事を続けていけない。それで分かったつもりになってはいけないと思うのである。謙虚に、うぬばれず、迷惑をかけない範囲でできるだけ近づいて、本当は何か問題なのか情報を集めたい。

次に、「こうするべきだ」と押し付けようとしている先進国と呼ばれる我々の豊かな暮らしぶりは、今のところ持続可能性の全くないものである。それどころか資源を食いつぶし環境を破壊し人類の滅亡をも招きかねない。それなのに国際協力の現場では常に持続可能性が議論される。これは矛盾している。先進国の社会構造の転換こそ率先して進めなければならない。

その上に、池住義憲先生の言葉「貧困は構造的暴力の問題である」は非常に重い。豊かな国と貧しい国、豊かな人と貧しい人の間の「構造的暴力の問題」を忘れがちであ

る。我々が先進国側の豊かさにあぐらをかいて実施している国際協力／援助は、「構造的暴力の問題」の免罪符と言えるかもしれない。

それでも現場は希望を持って明るく楽しくあるべきだ。TICOの活動も「物をあげる」→「何かしてあげる」→「教えてあげる」→「補完し合って一緒に活動する」と質がだんだん変化している（物をあげる必要がある場合も多々あるが）。末端でがんばっている人達と「補完し合って一緒に活動する」ことは非常に楽しいことである。

そしていつか構造的暴力とも共に戦いたい。



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療実践しながら、代表としてTICOを運営。

住民の健康は、 ザンビア／チボンボ郡農村地域プライマ

首都ルサカから北へ100キロほど走ったところにあるモンボシ地域は、広がるサバンナにトウモロコシ畑と民家が散らばっているザンビアの典型的な農村です。最寄りの診療所が30キロも離れた町にしかなく、子どもの予防接種を受けようにも出張検診の予定が当てにならないなど、健康を守るうえでとても苦労と忍耐を強いられる環境であることも典型的でした。2007年8月から3年計画で行ってきたこの保健プ

成果1

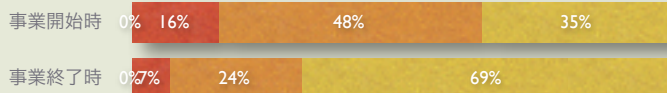


研修を受けた住民有志が住民保健ボランティアとして、日常の中で住民の健康に関する相談を受けたり、診療所での乳幼児検診・妊婦検診や診察を手伝っています。

☞診療所の妊婦検診で、住民保健ボランティアが血圧測定中。職員は看護師一人だけなので、ボランティアの補助がなくては業務が滞ってしまう。

乳幼児検診は体重測定と予防接種が主な内容で、毎月受ける必要があります。以前は出張検診が数ヶ月に1回程度しか開かれませんでした。現在は診療所で毎週受けることができます。乳幼児検診の開催頻度に満足していますか？

■ 大変不満 ■ 不満 ■ 満足 ■ 大変満足



大変満足という人の割合が大きく伸びて、3分の2を超えました。診療所では毎週150人以上の子どもが検診を受けています。

成果2

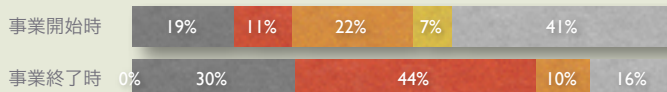


昨年3月にモンボシ診療所が開所して、1万人の住民が診察や検診を受けることができるようになりました。自宅ではなく、診療所でお産もできるようになりました。

☞患者さん（左）を診察中。ザンビアでは、看護師（右）でも診察や薬の処方を行うことができます。住民保健ボランティア（中）が薬の準備などを手伝っている。ザンビア政府の診療所として運営されているので、診察料や薬代は無料。

子どもが病気やけがをしてから、診察を受けたり薬を入手したりするまでに何日かかりましたか？

■ 0～1日 ■ 2～3日 ■ 4～7日 ■ 8日以上 ■ サービス受けず



事業開始時は平均6.2日でしたが、事業終了時は2.2日と3分の1近く短縮しました。モンボシ診療所ができたことで、遠い人でも歩いて1時間で診察を受けることができます。

住民が守る

田淵幸一郎

(保健医療専門家／医師)

Twitter@ktabuchi

リーヘルスケア・プロジェクト終了報告

プロジェクトでは、お母さんが安心して子どもを産み育てることができ、子どもたちが健やかに成長できる環境を住民たち自身で作りと、守れるようになることを目標に活動してきました。今年5月に成功をもって終わることができましたので、4つの成果をご報告いたします。Face to Face 誌第13号以降の経過報告もあわせてご覧下さい。なお本事業はJICA草の根技術協力事業として実施されました。

成3果

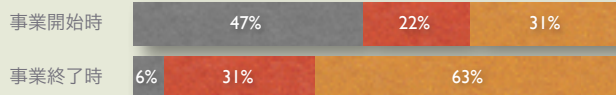


住民保健ボランティアが定期的に自分の村をまわって、乳幼児をもつお母さんたちに子どもの病気の対処法や予防法など、正しい保健の知識を学んでもらっています。

☞カリミナ村に住民保健ボランティアが出張して乳幼児検診の体重測定中。検診終了後、集まったお母さんたちにマラリア予防の講話をした。

蚊に刺されないことは、マラリア予防の基本です。蚊帳を持っている人の割合が、事業前後で67%から91%に増えていました。（さらに蚊帳を持っている人に質問）昨夜寝るときに家族で蚊帳を使いましたか？

■ 誰も使わず ■ 一部が使った ■ 全員使った



蚊帳を持っていたとしても使わない人が半分もいたのに、ほとんどの人が使うようになり、行動が変化しました。

成4果



子どもたちの栄養状態を改善するために、住民保健ボランティアがお母さんたちに栄養教室を開いて、簡単に入手できる食材で栄養のある料理を実習してもらっています。

☞TICOの首都事業のパートナー（左端）を講師に招いて、住民保健ボランティアが調理実習中。男性ボランティアも参加した。

あなたの子どもの現在の栄養状態に満足していますか？

■ 大変不満足 ■ 不満足 ■ 満足 ■ 大変満足



大変満足している人の割合が大幅に増えて、3分の2を超えました。子どもの体重も増えてくれることでしょう。

データ出典：（事業開始時）2007年11月、1歳未満の乳児をもつ母親へのインタビュー調査。モンボシ地域内のカリミナ、ムプンドゥ、カラスワ、ハンクワ、チワラ、ムソペロの6ヶ村および商業農場のレオンにて、延べ99名の回答を得た。2009年3月に、モンボシNHCによる検診記録からデータを収集した。；（事業終了時）2010年4月、1歳未満の乳児をもつ母親へのインタビュー調査。プロジェクト開始時調査と同じ6ヶ村にて、延べ86名の回答を得た。また、2010年4月、モンボシ診療所の診療記録からもデータを収集した。

病院前外傷ケア研修 in カンボジア

田中準一
(インターン)

ポチェントン病院

6月29～30日に開催されたポチェントン病院でのPTEC (Pre-hospital Trauma Evaluation and Care: 病院前外傷ケア) 研修の様子をお知らせ致します。病院前外傷ケア研修とは、交通事故やその他の事故により受傷した傷病者を発見(救急通報)から病院到着までいかに安全かつ迅速に搬送するか、その一連の流れを学ぶことを意図した研修です。

今回の研修にはプノンペン市内からポチェントン病院(2隊6名)、市民病院、市保健局の3救急隊から12名の参加者を募り合同で研修を実施致しました。これまでにプロジェクトで行ってきた研修の総まとめのような内容で、断片的だった知識や技術を病院前ケアの一連の流れとして理解してもらうことが主な目的です。また、今回の研修ではこれまで指導される立場であることが多かったTOT(Training of Trainer: トレーナー研修の研修生)を指導者として迎え、研修の指導にあたる機会とすることを併せて考慮致しました。



腹部刺傷の固定方法を学ぶ

研修は渡部医師の講義(外傷の疫学、PTECコースの概要)から始まり、TICOカンボジア事務所スタッフによる外傷初期診療のデモンストレーションとその解説を行い、その後は二つのブースに分かれて、状況評価(事故現場の状況)、初期評価(意識、気道開通、呼吸、循環等の生理学的評価)、全身観察(身体に生じた外傷の解剖学的な評価)、車内活動(救急車内での活動)、ネックカラーのつけ方、ヘルメットの安全な脱がし方、脊椎管理、救急ケアと多種多様な内容を学んで頂きました。また、日本からは災害医療でご活躍中の田淵俊次医師も応援にかけつけて下さり研修をサポートしてくださいました。(写真上)

研修では様々な内容を学んでもらいましたが、各救急隊とも熱心に参加し、実践練習の場面ではお互いに意見を出し合い疑問点を解決しようとしているのが印象的でした。また、香川県のJICA事業(カンボジア医療人材育成プログラム)で日本に招聘されたチーチャンナリット医師、サター医師、クリー医師も指導者として参加し大活躍してくれました。

今回の研修の締めは各救急隊の模擬診療実践テストでした。たくさんの評価者に囲まれて非常に緊張したことと思いますが、完璧とは言えないまでも研修で学んだ内容を十分に取り入れた模擬診療を行ってくれました。(写真左下)模擬診療後には各救急隊へのフィードバックが行われましたが、良いところは十分に褒め、改善が必要な点はしっかりと指摘するという理想的な指導が、カンボジア人指導者からも行われ大変感激致しました。これまでの研修を通じてTOTは十分に育ってきており、カンボジア人によるカンボジア人のための指導が行える状況が現実味を帯びてきたと感じることができました。



緊張の模擬診療テスト

また、プノンペン市内の3つ救急隊を一堂に集めて研修を行ったことは情報交換の機会を提供し、お互いの良い刺激になったのではないかと思います。今回学んだ内容がすぐに実際の実務の流れとして取りこまれることは難しいことかもしれませんが、病院前外傷ケアの標準化は救急外傷診療の知識・技術のボトムアップを図る上で非常に重要なことであると考えますので、カンボジア人指導者を中心にした研修が自立的に開催されること目標とし今後も関わっていきたいと考えます。

必要な観察と処置が行える救急隊がこのプノンペン市、そしてカンボジア全土に根付くことを切に祈ります。



真剣な眼差しで評価を行う指導者

研修のその後

カンボジア事務所でも事業終了後の研修の継続に関して色々と検討しておりましたが先日、TOTであるクリー医師から嬉しいお知らせがありました。その内容はTOTのメンバーや香川県のJICA事業（カンボジア医療人材育成プログラム）で日本に招聘された医師を中心として『初期救急に関する委員会を作りたい!!』というものでした。委員会の活動内容としては、プノンペン市内の救急隊、病院への研修の実施、指導ガイドラインの作成、月例の会合を行い最新の知識を共有することなどが挙げられていました。カンボジア人によるカンボジア人のための初期救急が本格的に始動したということになります。自発的にこのような計画が打ち出されたことにTICOカンボジア事務所員一同大喜びでした。カンボジアでの支援活動をしていて一番嬉しい瞬間に立ち会えたことが、私としてもとても幸せでした。彼らの計画が実現へと向かうのを温かく見守りつつ、必要な場面ではサポートできればと考えております。

難しい階級社会

今回の研修で気になったことは、カンボジア人に根付いた階級社会（制度）です。今回の研修に関わった職種でいえば、医師をトップとして→准医師→看護師→ドライバー（医療資格なし）という順序になるのですが、ドライバーが准医師に正しい手順を説明しても却下されるという場面が見られました。また、参加医師からも看護師が医師に指導をされ評価を受けるというのはカンボジアでは難しいという意見も聞かれました。日本でもそういった慣習が完全に無くなったというわけではありませんが、研修内容によっては看護師から医師に指導が行われるような状況でもできております。経験があるものが経験のないものに教える、伝える。そういった当たり前のことが受け入れられない社会ではその進歩も妨げられてしまうことでしょう。



研修でも大活躍したクリー医師の熱心な講義

カンボジアのラジオ番組デビュー！

大坪加奈子（事務所長）

JICAカンボジア事務所は広報の一環として、ラジオ番組を通して活動紹介を行っており、この度、JICA草の根技術協力事業としてTICOが実施している「低所得者の人々の命を守るセーフティネット強化事業」の紹介のためTICOが出演させて頂くことになりました。TICOカンボジア事務所初のラジオ出演です。TICOが協力して事業を進めている関係者対象に事前に取材・編集したものを放送するという構成で、放送日にはスタジオに行き、放送の様子を見学させて頂きました。カンボジアの大半のラジオ番組はリスナー参加型で、質問や意見を携帯電話で受け付けています。今回も1時間番組の中で30分は活動紹介、30分はリスナーからの質問を受け付けました。

「ソンネーソンナーティアモイジャイカ（JICAと一緒に楽しく話そうという意味）」という名前の番組で、「ジャジャジャ ジャジャイカー♪」と軽快な音楽で番組が始まりました。救急車等の効果音も巧みに使用し、「説明」と「取材で得た生の声」を交互に組み込む形になっており、当事者である事を忘れて楽しんで番組に参加させてもらいました。

「リスナーからの質問は来るのかな」と不安に思っていると、全国から次々に質問が寄せられて本当に驚きました！「村人が火傷で死亡したケースがあり、どう対処したらよかったのか」や「水難事故での対処方法」への質問や「自分の住む州も貧しいので、ぜひワークショップをやしてほしい」等の要望も寄せられました。特に生活に密着する部分が多いためか、ファーストエイドに関する質問が多数寄せられ、結局、5分延長しての放送終了となりました。全国のみなさんに関心をもっていただけ、本当にありがたい限りです。今後もメディアを上手く活用して広報していけたらと考えています。



ンコンジェ・コミュニティースクール 学校建設支援開始！



TICOが活動する中央州はザンビアの中でも特に就学率の低い地域の一つとして知られています。住民の大多数が農業に従事しており、人口密度の低さから政府によって建設される学校数が絶対的に不足しています。一番近くの小学校へ通学するために子ども達が毎日往復6時間かけて歩いて行くことも珍しいことではありません。農村地域ではインフラも十分整備されておらず、雨期になるといたるところに流れの速い川ができてしまい、子どもたちは学校に行くことができません。

この地域に蔓延する貧困問題も教育の普及のための高いハードルです。中央州チボンボ郡のほとんどの子どもたちは政府の運営する小学校に通うことができず、地域住民が自主運営するコミュニティースクールに通っています。政府の支援はコミュニティースクールにはほとんど届かず、水も電気も無い薄暗い学校で10人の生徒が一冊の教科書を使って勉強するのは当たり前前の状況です。教室や教師の数が足りないため、青空教室を行ないながら、1人の教師が3学年を教えることもあります。このように、コミュニティにおいてできる限りの対応は行っているものの、ほとんどが農家である住民は、収穫の悪い年等には教師への給料を支払うことができず、教師が村を出て行ってしまうことも少なくありません。

TICOでは公益社団法人セカンドハンドからの資金協力で、モンボシ地区でのコミュニティースクール建設を開始するべく、4月より現地調査を行ってきました。慎重な検討の結果、TICOはンコンジェ・コミュニティースクールへ学校建設の支援を行なうことを決定しました。

モンボシのヘルスポストから更に車で1時間進むと林の先に見える一軒の草葺きの建物。ここがンコンジェ・コミュニティースクールです。

現在ンコンジェ・コミュニティースクールでは1年生から7年生まで500人以上の生徒が勉強していますが、校舎はレンガと粘土で作った草葺き屋根の3教室だけ。1・2年生は大きな木の下で青空教室をしています。コミュニティで一生懸命作ったトイレも雨期の間に崩れてしまい、現在は500人の生徒で1つのトイレを使わなくてはいけない状況です。

低学年の指導を担当しているシアドゥンカ先生（右上写真左）は、校長であるご主人と共に村の子供たちに勉強を教え始めてから10年が経ちます。曰く「乾期の強い日差しの下、外で勉強しないといけない1・2年生は本当に大変なの。でもみんな勉強が大好きだから毎日何時間もかけて学校に来るのよ。新しい校舎ができれば、日差しを気にせずみんなもっと授業に集中できるはずだわ。」

今回の支援では、校舎の他にトイレ3棟、そして先生の家の建設を予定しています。

PTAのメンバーの一人、ムコカさん（左上写真中央）は「学校建設は子どもたちの教育環境を変えるだけじゃない、コミュニティの意識も変えてくれるはずだ。」と信じています。「残念なことに、この地域にはまだまだ子どもを学校に通わせていない親がたくさんいるんだ。コミュニティのみんなで一緒に素敵な学校を建てて、政府からいい先生が来てくれば、そういう親が教育にもっと価値を見いだしてくれるはずさ。子どもの教育環境をよくするためには、まず親を変えなくちゃ!このチャンスを与えてくれた日本の皆さんには感謝しきれないよ。」

苦しい状況下でも子ども達に少しでもいい教育を受けさせたいと頑張るコミュニティのメンバー達。どうかンコンジェ・コミュニティースクールへの応援をよろしくお願いします。



支援のカタチ ～わらびの会の場合～

人手不足や高齢化などで放置されたままになっている地元のゆず畑を管理している「わらびの会（徳島県美馬市木屋平）」。10年以上に亘って、ゆずを収穫して得た収益金を、T I C Oに寄付していただいています。T I C Oも毎年ゆずの収穫をお手伝いしています。

今回は、わらびの会の中心メンバーである地造津根子さん、廣瀬文代さん、新居和代さんに集まっていただき、わらびの会設立の経緯やいままでの活動についてお話を伺いました。

1998年わらびの会発足時からつけられているノート



わらびの会の活動はいつからどういう風に始まったんですか？

新居：吉田先生が木屋平診療所の不定期の先生で来られよったんよ。それで先生のお話を聞くようになったんやな。

地造：最初はね、ようけ集まったな。

新居：地球人カレッジin木屋平[1998年3月18日開催]って名前つけてちらしもはったりして。あんときごつつい力入っていろいろ声かけもして、ほんで割と人集まったんな。ほいで、お話を聞きよったけど結局自分たちは何が出来るんかな、みたいな話で、ほなゆず取りしてそれを支援に当てたらええんちゃうんっていう話が出て来て・・・。

その時点でそのアイディアがあったんですか？

地造：その集まりがあってから、何人か集まって話し合いをして。もうゆずをよう取らん人ができてきて、放置の園ができるよな、もったいないよな、っていう話で。

廣瀬：（放置されたゆず畑を）探しよったんな。ほしたらすぐあった。

地造：手入れ4～5年してない園だったけん、草刈とかしだして、その年に初めて収穫したんよ。

新居：ほんでわらびの会でゆず取りした次の年に、また吉田先生に乘せられてザンビアへ行ってもたんよ。（笑）

ザンビアにはどなたが行ったんですか？

新居：廣瀬さんの旦那さんとうちの旦那と、全部で4人じゃな。あんときみんなノリよかったんなあ。「行ってこ～い。」「は～い。」みたいな。

廣瀬：吉田先生に乗ったのは、あれやな、5人に1人の子どもが亡くなるっていいよったんな、あのときに。同じ母親としてそれはせこいな[注：阿波弁でしんどいの意]っていう感じで。少しでもその手助けになれば、っていうような。

地造：私はそんな大義名分なかったんよ。ほなけどな、せっかく

話聞いたのに、このままでは、っていうぐらいの気持ちで。

新居：うちの主人は、昔、吉田先生が子どもの頃にうちに遊びに来たことがあるって話で「多分一緒に遊んどわ。」って二人で盛り上がって、主人、割と乗りやすいもんやけん、「これは行てこないかん。」って。そのまま行てしもた。（笑）

廣瀬：話早かったよな。うちのお父ちゃんもリフレッシュ休暇を取れるけん、電話して「行けへん？」って言うたら、電話一本やったな。「行く。」言うて。（笑）

新居：まあ、これがいつまで続くんかなって思ったりするときあるけど、主人とかは、ザンビア行ったときの、あの子どもの眼が忘れられて言って、がんばらなあかんのちゃうん、みたなこと言うな。なんせ、すごい可愛らしい眼してるって。

わらびの会という名前は誰がつけたんですか？

新居：私のいとこなんですけど、わらびは根っこで広がっていくから、そういうような会になったらええな、っていうて。

地造：摘むほどええんよ、わらびってな。ぱつと出たのをとつといたら、次の根っこから根っこへまた伸びるんよ。

廣瀬：山間部はな、閉鎖的で変化は好まんのよな。それにしても、割合長続きしよるな。

地造：まあ10年以上もつとる会は少ないわな。自分でなんとか出来る人が多いから、協力せんのよな。

廣瀬：あとは、前の通りっていうのが多いな。こうやってしよったけん、こうやってしようっていうのが。時代が変わるのに合わせて行動したいんよ。だからこそ、わらびの会はな、どんなことがあってもめげずに立ち上がろうって意味やったんよ。

活動の中で1番印象に残っていることを教えてください。

新居：やっぱりなあ、ザンビアから帰ってきた男性陣がキラキラしてたんがすごい印象に残ってる。いまでも生き生きと昨日のことのように語るけん。

廣瀬：私も、ザンビアに行ってもらったことかなあ。

地造：私はいろんな人との出会いやな。仲間がおるからがんばれる。

お三方の明るさと強さ、そして多くの人との縁が今日までの「わらびの会」を支えてきたのだと感じました。地造さん、廣瀬さん、新居さん、とても楽しいインタビューをどうもありがとうございました！

今年のゆず狩りは11月14日です。みなさんは是非ご参加ください！



昨年のゆず狩りの様子



左から地造さん、新居さん、廣瀬さん

新職員紹介

酒井浩子

学生時代から国際保健に興味があり、日本で看護師としての病院勤務を経て、ミャンマーでNGOの医療協力活動に参加。その後、大学院で国際協力分野における公衆衛生学を学び、今春卒業しました。



TICOでは8月からザンビアに赴任しています。首都ルサカから北に約100Km行った先にあるモンボシで、プライマリーヘルスケアプロジェクト(2007-2010年、p2-3参照)から妊産婦ケアに焦点を当て引き継ぐ形で、「地域住民が支える安全な妊娠/出産の支援事業」が開始されます。私はその保健医療専門家として今後モンボシ地域を中心に活動していきます。

初めてのザンビアは、とにかく学ぶことの多い日々で毎日いろんな発見があります。物事がゆっくりしか進まずにはがゆい思いをすることもあります。村の人たちは穏やかで親切な方が多く、一緒にプロジェクトを進めていく彼らの仕事に対するモチベーションも高く、一緒に活動するのがとても楽しみです。

対象地では、出産介助のトレーニングを受けた人材の不足、分娩施設のある医療機関へのアクセスの悪さ、妊産婦の登録ができていないこと、緊急時に対処できる準備がないこと、など妊産婦保健分野での課題は多くあります。安全なお産をサポートできるシステムと環境を整え、お産に関する住民の意識・知識を高め、一人でも多くの妊婦さんが幸せに赤ちゃんを抱けるよう、村の人と一緒に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局長 福士庸二のつぶやき

『立ち位置』

最近気になる言葉は『立ち位置』。先日聴講した徳島大学の「国際協力論」の講師を務めた池住義憲先生が、「暴力は、振るう人と受ける人という2つの立場と、それ以外に忘れてはいけないもう1つの立場がある。それは傍観する人である。」と教えてくれた。世界中で貧困、戦争、飢餓など様々な問題が山積し、それらの問題が益々大きくなる今日、あなたの立ち位置は？。どこに立ち、何を見て、何を考え、何をしているのでしょうか？立つ位置が違えば、見えるものが違い、考え方も違い、行動までもが違う。あなたも『立ち位置』を意識してみてください。別の答えが見つかるかもしれませんね。



マラウィ人とイギリス人の友人と

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方

リサイクルウェブ、矢田安枝、原田栄枝、姫野雅義、白石勝美、石岡ミサオ、TICOサポートクラブ、高木クニ子、橋本伸子、セカンドハンド、秋月良子、寺口美香、田淵規子、石田亘良、今心(株)、三田理化学工業(株)、金納千晴、福士庸二、匿名3名

新たに入会された方

井上さおり、岩松真里、石島彩華、三田理化学工業(株)、酒井浩子、小澤萌、凌泰君、河村、匿名1名

会員を更新された方

篠原隆史、谷泰伸、入交秋子、白石吉彦、原田栄枝、井原 宏、石田亘良、酒巻栄子、田岡敬子、寺口美香、寺田由紀、中村晃一、中村純子、馬場

節子、ヒラオカ薬局、船津まさえ、峯裕恵、岡崎明美、吉見千代、古川久美子、香西邦明、佐藤修、佐藤三千子、篠原弘子、住友和子、地造津根子、浮森和美、武田律、福井康雄、福井照実、福士美幸、鈴木薫、六車ハルエ、廣瀬文代、佐古和雄・友美、田淵幸一郎、田淵千夏、橋本浩一、傍示桂子、清水瑠沙香、竹中洋史、西泉伸也・多衣子、高井美穂後援会事務所、瀧浩樹、津田道子、山下創、今心(株)、矢野祖、梯真由美、長野晶子、大室直子、木村秀樹、吉田修・益子、福士庸二

●2010年6月16日～2010年9月21日分

●順不同、敬称略

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649 (加入者名) TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店 (店番号344)

普通 0199692

特定非営利活動法人TICO

代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ) テイコ

募金箱 — さくら診療所 (徳島県吉野川市) に

常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOニュースレター Face to Face 第23号

2010年10月発行 発行人：吉田 修

編集：庄田多江

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話/ファクス：0883-42-2271

メール：info@tico.or.jp / ウェブサイト：www.tico.or.jp